

講演：色を着る、色を脱ぐ—アンリアレイジと京都の技術

ANREALAGE デザイナー 森永邦彦

LECTURE

COLOR/UNCOLOR: KYOTO AND ANREALAGE'S CHALLENGE

Kunihiko MORINAGA, Designer

Some of the works by Kunihiko Morinaga, designer of the fashion brand Anrealage, aggressively incorporate state-of-the-art technologies. Among them are works that use new technologies fostered by traditional art in Kyoto. As an example, his autumn–winter 2013 season works, entitled Color, use a textile dyed by the photochromic method. The textile is normally white, but when exposed to ultraviolet rays, it becomes colored. This technology was applied to textiles by a dyeing factory in Kyoto and has been put into practical use.

Morinaga's works include some produced by great labor. Some appear to turn the clock back from the modern mass-production, mass-consumption age. Some are designed to form geometric shapes, such as a sphere, delta cone, or rectangular solid. Some are purposefully designed to look irregularly shaped, created from patterns prepared by means of irregularly scaled measures. What is common among these works is that Morinaga finds areas that have not been designed in the past, and creates works by taking the procedure of redesigning such areas. Morinaga says that he has never created works based on inspirations from fashion in the past and that he always seeks new ideas — he always wonders what would happen if things having dimensions completely different from clothes were incorporated into clothes.

KCI は 2014 年 4 月 19 日、京都国立近代美術館講堂にて「色を着る、色を脱ぐ—アンリアレイジと京都の技術」と題する講演会を開催した。本講演は、2014 年 3 月 21 日から 5 月 11 日まで同美術館で開催された「Future Beauty 日本ファッション：不連続と連続」展の関連イベントである。講演者の「ANREALAGE (アンリアレイジ)」デザイナー、森永邦彦氏には「Future Beauty」展への出展作品を中心に、京都で培われた新技術との協業やクリエイションの方法論について語っていただいた。

KCI：「Future Beauty」京都展では森永さんの作品を4点出展しています。まずはそのうちの一つ「COLOR」というテーマの作品について森永さんにお話を伺いたと思います。

森永：「COLOR」(2013年秋冬)についてとのことですが、私が今着ている白いコートは、そのシーズンの作品のひとつです。今は白ですけど、紫外線に当たると反応して色が浮かび上がります。ですので、外に出て紫外線を浴びればカラフルなコートになり、室内に入ると再び白いコートに戻ります。たくさんのデザイナーが色をテーマに服を作ったり、様々なブランドが新しい流行色を生み出す一方、その色も半年後、一年後には古びたものになり見捨てられてしまう傾向があります。そういう常に消費され続ける色のサイクルから脱け出した服を作ることができないか、というのがこのシーズンの出発点になっています。

KCI：紫外線の有無によって色が変わるとのことですが、そのメカニズムをご説明いただけますか。

森永：「フォトクロミック」という、紫外線が当たると分子構造が変わる現象を利用しています。通常はサングラスに使われる偏光グラスや、紫外線の強さを計るUVシートなど、繊維とは別の分野で使用されることが多い技術です。これを今回は繊維に応用しました。

ショーでは、人工太陽照明をステージの真ん中に吊り下げました。モデルがステージの端を歩いている時は真っ白なコートですが、人工太陽照明の下に立つと、照明から発せられる紫外線に反応してピンクや青などの色に変化していきます。

KCI：皆さんの反応はどうでしたか。

森永：ショーの時はバックヤードにいましたが、それでも会場からのどよめきは聞こえてきました。

KCI：普通は染色されている服があって、それが紫外線によって退色してしましますが、紫外線を受けると逆に色が現れるというふうには考えませんが、このフォトクロミックの技術を服に応用しようと思った経緯を教えてくださいませんか。

森永：温度で変化させたり、あるいは電気を通して変えたりと色を変える現象は様々ありますが、普通に生活していて当たり前になる現象から色が変わるものはないかと考えた時、フォトクロミックに思い至ったわけです。フォトクロミックという技術はもともと知っていたので、それをもし繊維に応用できれば、日常生活の中で色が変わる服を作れるのではないかと考えました。

そこでフォトクロミックの染色をしているところがないかと探しているうちに、小杉染色さんという会社を知って、連絡を取ったわけです。

KCI：小杉染色さんは京都市の南区にある会社で、レースや布帛の染色を手がけていらっ

しゃいます。京都というといつい伝統産業や着物関係を思い浮かべますが、他方で新しい技術開発を積極的に行っている会社がたくさんあって、小杉染色さんもその中の一つです。

今日は小杉染色の方が会場にお見えになっていますので、森永さんとの協業についてお話を伺いたいと思います。フォトクロミック染色という新しい技術を使った協業にはいろいろと苦労があたりだったと想像します。その点を教えていただけますでしょうか。

小杉染色：まずは森永さんからご連絡を頂いて、それでは一度お会いしてお話を、となりました。その時に染める素材の候補を見せていただいたのですが、こちらが驚くような素材もあり、技術担当者がこれはできる、これはできないとその場で選別させていただきました。

そもそもレースや布帛程度のフォトクロミック染色は行っていたものの、ナイロン以外の素材を染めたり、洋服を仕立てるために必要な大量の生地を染めることは未経験でした。

森永：しかし、やりたいことを全部お話したら、小杉染色さんがのってきて下さったように感じました。

小杉染色：とにかく必死で染め、試作品を森永さんにお送りして見てもらいました。

森永：最初に染め上がってきたものを見た時、あまりの綺麗さに感動してしまって、どんどんアイデアが浮かんできてしまい、その結果、あれもこれもと染めるものが増えていったと思います。

KCI：フォトクロミックの染料は何色あるんですか。

小杉染色：実際にはイエローとマゼンタ、ブルーの3色しかありません。それをミックスして色を出していきます。

森永：三原色で様々な色を生み出していく感じです。

小杉染色：洋服に必要な生地はレースや布帛とは染める量が違います。同じように染めていてもムラができてしまうので、もっと細かく染めていこうとか、あるいは同じ生地でも3回、4回と何度も染めたりしました。

それから、通常の機械染めではうまく染まらないので、今回は機械の横に人が張り付いて生地を広げながら染めるという、「半機械・半人間」のような感じで染めました。

KCI：通常の染色とは異なる気遣いやご苦労があったということですね。

小杉染色：染めムラが出易いことに加え、フォトクロミック特有の問題として、染料が透明なので染めている段階で本当に希望通りの色に染まっているのか、どの程度の濃さで染まっているのか分かりませんでした。徹夜して染めて、翌朝に外で色を確認するというのを何度も繰り返しました。また、天候によって発色の度合いも変わってきますので、東京にいらっしゃる森永さんが確認したらものすごくきれいな色が出ているのに、京都では

ほとんど色が浮かび上がらないということもありましたね。染め上がりを確認するのが難しかったです。

森永：縫製工場も大変だったようです。指示書では赤や青のパーツのはずが、送られてきたものを見ればただの白い布。縫い糸もそうです。実際、指示書通りに縫製していると思っても、太陽の下でみると間違った配色で縫製されていたりしました。ブラックライトを送ってそれで確認しながら作業を進めてもらったりもしましたが、毎回そんなこともできませんから、工場の方はストレスを溜めながらの作業になったそうです。

KCI：デザイナーさんがショーに出せるような完成度の高いものを要求した時、通常染め屋さんとしては前例のないことや自信のないことはすぐに断ってしまうと思います。時間が限られている場合などは特に。それでも森永さんの要求を小杉染色さんが真摯に受け止め、実現したのはとてもレアなケースだったのではないのでしょうか。

小杉染色：それは森永さんの気迫と、新しいことに挑戦したいという私どもの気構え、その二つがぴったり合った結果だと思います。

森永：こちらの求めていることが分からないと拒否するのではなく、僕が思い描いたことを信じて実現化していただきました。

小杉染色：ショーを一番前で見させてもらいましたが、最初に色が変わった時、後からもすごい歓声が聞こえてきて、あの時は皆が認めてくれた、本当に良かったと思いました。

KCI：ご苦労が多かった分、得るものも大きかった。

小杉染色：そうですね。フォトクロミックの技術を向上できたのはもちろん、テレビで紹介されたり、日々の営業で話が出たりと私どもの仕事を知っていただく機会になりました。新しい展望も見えてきたような気がします。

KCI：京都の染色技術が最新のクリエーションと結びついて、見る人をあっと驚かせるものを作り上げたということですね。本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

KCI：森永さんには「COLOR」以外の他の出展品についてもお話を伺いたと思います。展覧会のセクション2《平面性》には2010年春夏の「シルエット」という作品が、さらにセクション4《物語を紡ぐ》には2005年秋冬のパッチワークの作品が展示されています。この二つの作品についてお聞かせ願えますか。

森永：「シルエット」は服の平面性と立体性の関係を光と影で表現した作品です。一見すればジャケットやTシャツでも、実際には、ジャケットがTシャツで、Tシャツがパンツであるというように、シルエットによって浮かび上がる形と実際のアイテムが異なります、その相違を利用して、トップスやボトムスといったカテゴリーを超えた服を作ってみようと思いました。

KCI：すべての立体物を平面に置き換える影と、そこから想起される形への先入観を巧みに利用したシーズンですね。森永さんはこの前後、服のフォルムをテーマとして何シーズンか発表されていました。最初からフォルムに対して特別な考えを持ってらっしゃったのですか。

森永：最初はフォルムにこだわりがあったわけではなく、どちらかというとなんかを徹底的に追及するような仕事が多かったですね。例えば自分の手で大変な時間をかけて一着を作り上げるといったように。セクション4に出展しているパッチワークのジャケットはそれにあたります。通常のパッチワークで使うよりも細かく、100種類くらいの生地を使って根気よくつなぎ合わせていきます。徹底的な手作業です。

KCI：具体的にはどのくらいのパーツを使ったんですか。

森永：例えばジャケット1着で約2000パーツくらいあります。朝から晩まで作って、7かかかって1着のジャケットができる感じです。

KCI：20世紀以降、大量生産・大量消費の時代が到来し、いかに効率的に短時間で安くものを作るかということに主眼が置かれる時代が続いてきました。対して、森永さんのパッチワークの作品はそれとは逆行した制作態度ですね。それが非常に面白い。

森永：とても非効率な方法ですけど、ひとつの作業を丁寧に徹底的に繰り返していけば必ず出来上がるので、それを真摯にやろうと思っていた時期の作品ですね。この場合では今までにないようなパッチワークを作りたいと思って、今までにない細かさを追求しました。

KCI：森永さんの作品を見ていくと、過去に他のデザイナーさんが取り組んだことをプロデュースし直したり、あるいはコピーしたりせず、もっと別の表現方法がないかを追求してデザインしているのが感じられます。シーズンごとのコンセプトを考える時、毎シーズン違う出発点を設定するのでしょうか。

森永：出発点は毎回違います。ただ、過去の服の写真やイラストからインスピレーションを受けて作ったというのは一切ないですね。逆に全く関係ないものを当てはめてみたら面白くなるのではないかと、そういう可能性を感じられたものを出発点にしたりします。例えば「解像度の粗い洋服」や「残像のようにぶれた洋服」、「引き延ばされつぶれた洋服」、「骨組みのような洋服など、服を表現するときに使わない言葉が結びついた時、それに組み込んでみようと思ったりします。

KCI：まったく別次元のものを洋服に落とし込んだらどうなるか、どのような面白いものができるかということを考えているのですか。

森永：そうですね。

KCI：ターニングポイントとなるシーズンはありますか。

森永：2006年春夏の「BUTTER」、2009年春夏の「○△□」、2010年秋冬の「wideshortslimlong」でしょうか。「BUTTER」は何度もブリーチして染めた布をパッチワークしました。さらにTシャツを糸のように裂いてそれを全て結んで1本の長い糸にし、ニットを編んで、それを再び染めて煮沸しました。

KCI：時間と手間をかけたコレクションですね。

森永：逆に「○△□」はぎりぎりまで手を動かさずに、頭の中で考え抜いてから制作に取り掛かりました。球体、三角錐、立方体を服にできないか、服にした時にどうすればぴったりと体に合うかをじっくり考えました。考える時間も含めるなら、これもすごく時間をかけたコレクションと言えます。

KCI：2009年春夏「○△□」あたりから、先ほど取り上げた「シルエット」に代表されるフォルムがテーマとなっていますね。服を作る時に基準となるサイズや形があると思うんですけど、その基準をずらしたり、別の基準を持ってきたりすることで全く新しいフォルムの服を作ることができる。2010年秋冬の「wideshortslimlong」は、そういった観点のコレクションですね、

森永：はい。服を作る時に定規を使いますが、その定規がもし狂っていたら出てくる服はおかしな縮尺のものになります。それならいっそのこと面白い基準の定規を作って、それに基づいて服を作ってみようと思ったわけです。それが「wideshortslimlong」です。

KCI：出発点を少しずらしたり、変えたりすることで、アウトプットされたものがこれまで見たことのないものになる。大変興味深いコンセプトの立て方だと思います。

森永：服のデザイン以前の段階で何かをデザインしたいのかもしれませんが。生地が必要なならその生地を作り直したり、定規が必要なならその定規を作り直したり、色を染めるのであれば染める概念自体を破壊してみたい、思いもよらないところから出発して服を作りたい、またデザインされていない領域を見つけて、そこをデザインしてみたいという感じですか。

KCI：最新のコレクションも新しい領域を出発点にしているんですか。

森永：はい。私たちは暑い時に服を脱ぎ、寒い時には着こんで温度調節しますよね。今度のシーズンでは皮膚と服の間の温度を常に32度に保つ素材「アウトラスト」を使用しました。暑い時は温度を下げ、寒い時は温度を上げる特殊な素材です。これを使うと一見暑そうなファーやニットが着てみると全然暑くなかったり、涼しそうに見える服が実は暖かかったり、見た目と着た時のギャップがある服を作ることができます。

KCI：秋冬コレクションや春夏コレクションを超えて、今回は春夏秋冬全て入ってしまう。シーズンレスな服ですね。

森永：コレクションの名前は「シーズン (SEASON)」ですが。

KCI：毎シーズンのクリエーションの中で、森永さん自身が出発点や着眼点を変えて、新しいものにチャレンジしていらっしゃるのがよく分かりました。

「Future Beauty」京都展は日本ファッションの特色を4つのテーマに分けて読み解いていこうという展覧会なのですが、そのうちの3つのセクションに森永さんの作品が展示されています。唯一展示されていないのはセクション1《陰翳礼讃》ですけど、このセクションは色、特にモノクロームに対する日本人デザイナーの特異な観点をテーマにしています。それも森永さんの「COLOR」の作品と非常に近いところにあると考えると、森永さんの作品はセクション1から4までのすべてのテーマを網羅していることになります。今回の展覧会は、日本ファッションのDNAとはどういうものなのか、それはどう受け継がれているのかが大きな主題になっています。森永さんの作品にこれまでの日本人デザイナーたちによる様々な試みや提案が生かされている、森永さんは彼らのDNAをしっかりと受け継いでいると言えるのではないかと思います。

本日は貴重なお話をありがとうございました。

森永：ありがとうございました。

(聞き手：石関亮)

〈図版〉

- Fig. 1. 森永邦彦／ANREALAGE 《COLOR》2013年秋冬
Kunihiko Morinaga, ANREALAGE, Autumn/Winter 2013. ©ANREALAGE CO., LTD., photo by Seiji Ishigaki (BLOCKBUSTER).
- Fig. 2. フォトクロミック染色 小杉染色株式会社
Photo chromic color. ©KOSUGI DYEING Co., Ltd.
- Figs. 3. (左) 森永邦彦／ANREALAGE 《SILHOUETTE》2010年春夏、(右) 森永邦彦／ANREALAGE 《スズメノナミダ》2005年秋冬、「Future Beauty 日本ファッション：不連続の連続」会場風景
Left: Kunihiko Morinaga, ANREALAGE, Spring/Summer 2010. Right: Kunihiko Morinaga, ANREALAGE, Autumn/Winter 2005. The exhibition *Future Beauty*. ©KCI, photo by Osamu Watanabe.
- Fig. 4. 森永邦彦／ANREALAGE 《○△□》2009年春夏
Kunihiko Morinaga, ANREALAGE, Spring/Summer 2013. ©ANREALAGE CO., LTD., photo by Mihoko Fujiwara.
- Fig. 5. 森永邦彦／ANREALAGE 《SEASON》2014年秋冬
Kunihiko Morinaga, ANREALAGE, Autumn/Winter 2014. ©ANREALAGE CO., LTD., photo by Seiji Ishigaki (BLOCKBUSTER).

森永邦彦 (Kunihiko Morinaga)

1980年東京都生まれ。早稲田大学、バンタンデザイン研究所卒業。2003年から活動を開始。ブランド名「ANREALAGE (アンリアレイジ)」はA REAL (日常)、UN REAL (非日常)、AGE (時代) を組み合わせた造語。2005年、ニューヨークの新人デザイナーコンテスト「GEN ART 2005」でアバンギャルド大賞を受賞。2006年春夏より東京コレクションに参加。2011年、第29回毎日ファッション大賞新人賞・資生堂奨励賞受賞。2012年、個展「アンリアレイジ展 A REAL UN REAL AGE」(パルコミュージアム・東京)を開催。2013年、「フィロソフィカル・ファッション 2: A COLOR UN COLOR」(金沢21世紀美術館・石川)を開催。2015年春夏よりパリ・コレクションに参加。

(※肩書は掲載時のものです)